

19世紀後半におけるフィリピン糖業の発展

—— ネグロス島の甘蔗アシエンダ経営を中心に ——

なが の よし こ
永 野 善 子

はじめに

- I 19世紀後半におけるフィリピン糖輸出の推移
- II フィリピンの産糖地域と経営形態の変化
- III ネグロス島の甘蔗アシエンダの形成過程
- IV ネグロス島の甘蔗アシエンダ経営の分析
むすびにかえて

は じ め に

本稿は、19世紀後半におけるフィリピン糖業について、ネグロス島の甘蔗アシエンダ (hacienda) (注1) 経営を中心に考察することをその主題とする。

フィリピンは、1834年のマニラ開港を契機に資本主義世界の従属的農業国として再編成されたが、その糖業発展については、むしろ1855年のイロイロ港開港の方が大きな意味をもつ。同港開港後ネグロス島にアシエンダが形成され、賃労働者雇用を基調とする経営が成立したからである(注2)。ネグロス島は19世紀末までにフィリピン第1の産糖地域となり、20世紀前半のアメリカ植民地時代はもちろん、独立後においてもフィリピン糖業の中枢に位置している。したがって筆者は、ネグロス島の甘蔗アシエンダ経営に注目しつつ19世紀後半のフィリピン糖業を考察することが、先進諸国経済の一環に組み込まれたフィリピン糖業の発展形態を理論的に把握する第一歩となり、また低開発諸国の農業における資本主義発展の一形態とし

てフィリピン糖業を位置づけるための予備的作業になると期待するものである。

ところで本稿では、19世紀後半のフィリピン糖業、なかんずくネグロス島の糖業発展の画期を1855年から1909年までと設定する。それは以下のような理由による。

19世紀後半にフィリピンで生産された砂糖は含蜜糖であるが、20世紀に入り、フィリピン経済がアメリカ統治下に再編されていく過程で、糖業の近代化が促進され含蜜糖生産は徐々に分蜜糖生産に切り換えられた。この対米従属的糖業発展の実質的契機をなすものとして、1909年におけるペイン・オルドリッチ関税法 (Payne-Aldrich Tariff Act) の制定があげられる。同関税法によって制限付ではあるがフィリピン糖の対米無関税輸出が実現され、フィリピン各地で近代的製糖工場が設立されていった(注3)。ここに、筆者が19世紀後半におけるフィリピン糖業の形成過程を20世紀の糖業の歴史として考察し、その画期を1855年のイロイロ港開港から1909年のペイン・オルドリッチ関税法制定までとする所以がある。

さてここで内外の研究状況を概観すると、フィリピン糖業の研究は主として20世紀アメリカ統治期以後をその対象としてきたことがわかる。日本の諸論文では19世紀後半について若干考察され、20世紀の糖業が輸出・経営形態の側面から分析さ

れている(注4)。他方、海外では最近フィリピン糖業史の概説書(注5)が刊行され、ようやく研究の端緒についたというところである。ところがネグロス島に関しては、最近フィリピン人歴史学者L・バウソン(Leslie E. Bauzon)によって甘蔗アシエンダ成立史の本格的な研究が進められている。現在その動向が伝えられているとはいえ(注6)、著作は未刊であり、筆者は本稿執筆にあたって同氏の成果を十分摂取することはできなかった。そこで本稿では、筆者が入手し得た限りの史資料に依拠し、19世紀後半のネグロス島における甘蔗アシエンダの成立過程と経営形態の特質について、その概略を論ずるものである。

(注1) *hacienda*はスペイン語で、土地所有と経営形態の両概念を含む言葉であり、これに相当する英語に *estate* がある。19世紀フィリピンの *hacienda* の規模には地域的差異があり、その範囲は約100ヘクタールから数万ヘクタールにまで及んだ(ネグロス島については後述)。ただし、フィリピン研究において *hacienda* の概念は十分確定されていない。したがって本稿では、史資料のなかで *hacienda* と呼ばれる場合、または筆者がそうであると確定できる大規模な農場(=大規模な所有地)を *hacienda* とし、それ以外の場合は単に農場(=所有地)とする。なお現代フィリピンの *hacienda* は日本語で「ハシエンダ」と表記される場合が多いが、ピリピノ語には *asyenda* という言葉があることから(Panganiban, J. V., *Diksyunaryo-Tesouro Pilipino-Ingles*, Quezon City, Manlapaz Publishing Co., 1973, p. 80)、本稿では「アシエンダ」と表記することにした。

(注2) 本稿では、資本・賃労働関係が基本的生産関係として成立した経営形態を資本主義的経営と位置づける。ただし、筆者がここで資本主義的経営の成立およびその特質を問題にする意図は、フィリピン糖業における資本主義発展をその伝統的社会の変容過程との関連で把握し、19世紀後半と20世紀フィリピン糖業との結節点を見出すことにある。

(注3) 滝川勉編『フィリピンの糖業』アジア経済研究所 1966年 8ページ。ネグロス島には1912年に近代的工場が設立された。

(注4) 日本貿易研究所「比律賓の糖業」(『糖業より見たる広域経済の研究』栗田書店 1944年); 馬場啓之助編『世界の砂糖Ⅰ—フィリピンの砂糖』農林水産性向上会議 1959年; 滝川編 前掲書。

(注5) Quirino, C., *History of the Philippine Sugar Industry*, Manila, Kalayaan Publishing Co., 1974.

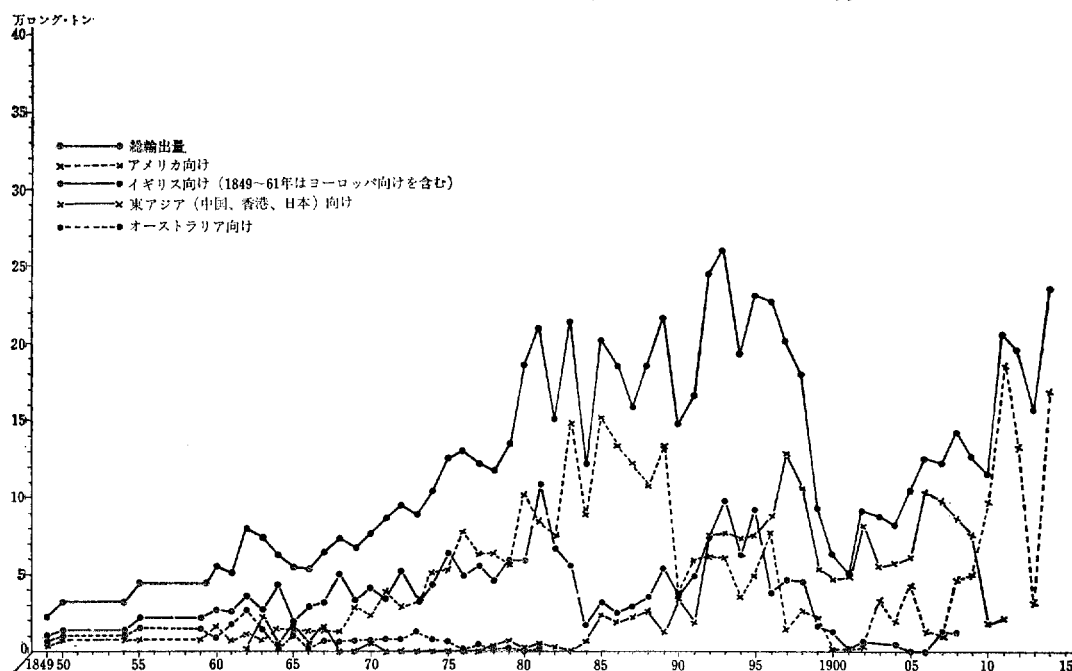
(注6) Bauzon, L. E., "Rural History, Land Tenure and the Negros Hacienda Complex: Some Preliminary Notes," *PSSC Social Science Information*, Vol. 1, No. 3 (Jan. 1974).

I 19世紀後半におけるフィリピン糖輸出の推移

スペインの植民地フィリピンは1834年のマニラ開港を契機に、イギリスを先頭とする当時の資本主義世界の従属的農業国として再編成された。同港開港後、1850年代から1870年代にかけて、ビサヤ地方、ミンダナオ島の諸港が次々に開港され、この結果フィリピンではイギリス綿製品の輸入が増加する一方、砂糖、マニラ麻、タバコ等の農産物輸出が発展したのである(注1)。

第1図によって砂糖輸出の推移をみると、輸出量は1850年代~70年代、1880年代~90年代、1900年代のおよそ三つの時期に異なるパターンで変化したことがわかる。砂糖輸出量は1850年代~70年代に2~3万トンから10万トン台へと順調に増加し1880~81年をへて1890年代にいたると10万トン台から20万トン台の間を大きく波動した(本稿で用いるトンはすべてロング・トン)。そして1893年には19世紀後半の最大輸出量26万2000トンを記録し、その結果40余年間に輸出量は11倍に増加したのである。ところが1899~1901年になると輸出量はフィリピン革命(1896~1902年)の影響を受けて激減し、1901年に下限の5万2000トンを記録、その後次第に回復するものの1908年に14万トン台に達した

第1図 砂糖の総輸出量と主要仕向け国別輸出量（1849～1914年）



（出所） 1849～1911年：Geerligs, H., *The World's Cane Sugar Industry*, Altrincham, Norman Roger, 1912, pp. 104—105. ただし、1850～54年、1855～59年は各年の平均値。

1912～14年： *Census of the Philippine Islands; Taken under the Direction of the Philippine Legislature in the Year 1918*, Manila, Bureau of Printing, 1920-21, Vol. 4, Part 2, p. 716.

（注） 単位はロング・トン。

にすぎない。したがって19世紀後半のフィリピン糖業は輸出量の推移からみて、1850年代から1880～81年までを形成期、1880年代初めから1897～98年までを発展期、その後の1900年代を低迷期、として把握されよう。

つぎに輸出先をみると、糖業形成期である1850年代～70年代の輸出先は、前半にはイギリス、オーストラリア、アメリカ、後半にはイギリス、アメリカであった。1870年代を通してイギリス・アメリカ市場は各々総輸出量の約30～40%を占めており、フィリピン糖業は両国市場を背景に形成されたといえる。しかし1880年代～90年代の糖業発展期の輸出市場は大きく変化していった。1880年

代にはアメリカ市場の圧倒的優位が続き、1890年には東アジア（中国・香港・日本）が主たる輸出先として台頭したからである。東アジアは、1890年代前半にはイギリスに次いで第2の市場であったが、同年代後半から1909年にいたる時期に第1の輸出先となり、その輸出量は全体の50～60%あるいはそれ以上を占めたのである。こうしてフィリピン糖業の低迷期を支えたのは東アジア市場であったことが確認される。

ところが1909年にペイン・オールドリッチ関税法が制定されると、アメリカ市場を背景に輸出量が激増する一方で対東アジア輸出は衰退の一途をたどった。かくてフィリピン糖業は東アジア市場か

ら切り離されてアメリカ市場に従属するのであるが、この期間は本稿の対象からはずれる。そこで砂糖輸出の考察をひとまず終えて^(注2)、つぎに産糖地域と経営形態の変化を概観する。

(注1) 19世紀後半の経済発展については, Legarda, B. F. Jr., *Foreign Trade, Economic Change and Entrepreneurship in the Nineteenth-Century Philippines*, Harvard University, Unpublished Ph. D. Dissertation, 1955; 池端雪浦「フィリピンにおけるモノカルチャー経済の史的考察——マニラ開港を端緒とする——」(『アジア経済』第11巻第4号 1970年4月)に詳しい。

(注2) 19世紀後半のフィリピン糖輸出の変化を世界の糖業発展の中に位置づけることは、今後の課題である。

II フィリピンの産糖地域と経営形態の変化

マニラ開港直後の1840年代～50年代に砂糖はパンパンガ、パンガシナン両州(provincia)を中心とする中部ルソン地方で生産され、ビサヤ諸島のセブ、パナイ両島がこれに加わったにすぎない^(注1)。当時の産糖地域と経営形態を詳細に記述した史料はないが、S・デ・マス(Sinibaldo de Mas)『1842年のフィリピン諸島実態報告』(1843年)、M・ブセータ(Manuel Buzeta), F・ブラボ(Felipe Bravo)『フィリピン諸島の地理、統計、歴史辞典』(1850—51年)から当時の砂糖生産が概観される^(注2)。

これらによると農場で甘蔗が栽培される場合、製糖能力約25～30トン(1農業年当り)の簡素な木製圧搾機が設備され、5～6ヘクタールに甘蔗が作付された(農場面積は不明)。もっとも当時のパンパンガ、ブラカン等の諸州では米・藍(anil)と甘蔗が隔年ごとに栽培されたこと、また1農場当りの甘蔗作付面積が比較的小規模なことから、マニ

ラ開港直後の中部ルソンの農場では砂糖生産をむしろ副業とする場合が多かったと思われる。

こうした農場では経営者である地主が水牛、圧搾機、倉庫を準備し、種苗費と牛飼育、製糖職人の賃金を負担した(農具は地主の経営費負担分に含まれていない)^(注3)小作農は、甘蔗栽培から刈取り・運搬までの一切の農業労働を自己の負担で行なった。そのため収穫期の刈取り・運搬に臨時労働を必要としたが、パンパンガでは小作農が互助関係を結んで賃金負担を軽減する例があり^(注4)、彼らが賃労働者を雇用した可能性は薄い。また製糖作業は収穫と同時にこなわれ、その際雇われる職人は小作農が兼ねる場合があることから、農場の主たる直接生産者は小作農、しかも地主と生産物を折半する^(注5)刈分小作農(カサマ=kasama)であった。1840年代～50年代の中部ルソンではこのように刈分小作(カサマハン=kasamajan)制に基づく地主・小作経営がみられ、地主が経営の主導権を掌握していたのである。

ところでこの地主・小作経営の変容形態として、当時中部ルソンのカトリック教団所有地で見られたインキリナート(inquilinato)制をあげることができる^(注6)。たとえばブラカン州には所有面積約2万ヘクタールのアシエンダ・ブエナ・ビスタ(Buena-vista)があり、その農場経営は中間借地人であるインキリーノ(inquilino)に託された^(注7)。彼らは教団に貨幣地代を納め刈分小作制に基づく農場経営を行なったが、地代(年額)は地価の4%弱であり、未墾地の開拓に際してそれは普通5年間据え置かれたといわれる。インキリーノは相当規模の大きな農場の経営者となったと予想されるが、その砂糖生産は前述の地主・小作経営と同様に小規模であった。

他方こうした木製圧搾機に依存する砂糖生産と

並んで、19世紀中葉のルソン島ですでにイギリス製圧搾機が導入されていたことは注目し値にする。前掲プセータ、ブラボによると、1850年当時のパンパンガ、ラグナ、カビテ、バタンガス諸州にスペイン人や教団が所有するアシエンダがあり、そのうちラグナとバタンガスではイギリス製蒸気動力圧搾機または水力圧搾機が設備された(注8)。とくにラグナのスペイン人地主は製糖設備の改良に熱心で、1831～33年に仏領ブルボン島からフランス人技師を招き「節約炉」(horno economico)を導入し、甘蔗の搾りかす——バガス(bagasses)——を燃料とすることに成功したのである(注9)。当時のアシエンダの経営形態は不明であるが、蒸気動力・水力圧搾機の導入や技術改良は1アシエンダ当りの砂糖生産量を増大させ、糖業を専業とするアシエンダを出現させる重要な要因となったと考えられる。1850年代～60年代以降の中部ルソンではとくにパンパンガを中心に糖業が発展し、同州の蒸気動力圧搾機数は1870年代～90年代に増加の一途をたどるのである(注10)。

このようにマニラ開港後の中部ルソンで砂糖生産が次第に発展する一方で、1855年にイロイロ港が開港されてネグロス島の糖業が勃興した。しかし後述するように同島の糖業は1860年代以降が本格的な形成期であり、同年代には中部ルソンのパンパンガが主たる産糖地域であった。ところが1870年代になるとパンパンガと並んでネグロス島が重要な産糖地域として台頭してくる。同年代の史料によれば、当時ルソン島のバタンガス、イロコス諸州、パナイ島のアンティケ、カピス両州では小経営が支配的であるが、ネグロス島とパンパンガ州ではアシエンダ経営が発達していたのである(注11)。1840年代～60年代に中部ルソンを中心とした砂糖生産は、1870年代にいたる過程でとくにパ

ンパンガとネグロス島で発展し(注12)、1880年代～90年代にはネグロス島を拠点とするのであった。前述のように1850年代から1890年代までの約40年間に砂糖輸出量は11倍に増加し、1893年には最大輸出量26万トン記録したが、同年の総生産量は30万トンであった(注13)。そのうちネグロス島が全体の42%、パンパンガ、タルラク両州の生産量合計が全体の15%を占め、バタンガス、イロイロ両州が各々13%でこれに続いた。19世紀後半におけるこうした産糖地域分布の変化は、同時に経営形態の変化を伴うものであった。

第1表によると、1902年の砂糖総生産量は18万トンで、そのうちの52%がネグロス島、20%が中

第1表 主要州別砂糖生産量・年間生産額1000ペソ以上の甘蔗農場＝製糖所数(1902年)

	砂糖生産量		同上規模の農場	
	ロング・トン	%	総数	生産額(年間)100万ペソ
フィリピン	180,217	100.0	1,075	660.3
イロコス2州	15,340	8.5	0	0
北イロコス	7,238	4.0	0	0
南イロコス	8,060	4.5	0	0
中部ルソン5州	36,324	20.2	293	95.3
パンパンガ	14,518	7.9	194	75.9
パンガシナン	9,374	5.2	4	0.8
ブラカナン	5,856	3.3	38	8.3
タルラク	3,773	2.1	34 ²⁾	6.2
ラグナ	3,003	1.7	23	4.1
ネグロス島	93,057	51.7	569	497.0
西ネグロス	87,525	48.6	531	464.4
東ネグロス	5,533	3.1	38	32.6
パナイ島イロイロ	4,524	2.5	62	37.3
セブ島	8,326	4.6	69	14.9
その他	22,646	12.6	82	15.8

(出所) *Census of the Philippine Islands: Taken under the Direction of the Philippine Commission in the Year 1903*, Washington, U. S. Bureau of the Census, 1905, Vol. 4, pp. 32, 290, 528—529.

(注) 1) センサスでは「製糖所」"sugar producing establishment"。しかし、賃金には農・工両部門が含まれているので、ここでは甘蔗農場＝製糖所とした。なお、砂糖の市場価格が1トン当り60～90ペソ、1ヘクタール当り平均砂糖生産量が2.5トンであることから、同上規模農場の甘蔗作付面積は5～10ヘクタール前後と概算される。

2) カピス州の2農場を含む。

第2表 甘蔗農場=製糖所(年間生産額1000ペソ以上)¹⁾の経営形態(1902年)

	州 別 総 計			1 甘 蔗 農 場 = 製 糖 所 平 均 ²⁾				
	甘蔗農場数	生産額 (年額)ペソ	賃労働者数 ³⁾ (月平均)人	資本 ⁴⁾ ペソ	生産額 年間(ペソ)	賃労働者数 (月平均)人	賃金総額 年間(ペソ)	1人当り賃金 (月平均)ペソ
フィリピン	1,075	6,603	45,247	10,752	6,142	42.1	3,782	7.5
西ネグロス	531	4,644	28,885	21,072	8,747	54.4	4,861	7.5
パンパンガ	194	759	6,328	12,540	3,911	32.6	4,885	12.5

(出所) *Census of the Philippine Islands: Taken under the Direction of the Philippine Commission in the Year 1903*, Washington, U. S. Bureau of the Census, 1905, Vol. 4, pp. 528—529.

(注) 1) 第1表(注)の1)をみよ。2) 州別総計に基づき算出。3) 農工を含む, 4) 具体的内容は不明。

部ルソン5州, 9%がイロコス2州で生産されている。この主要3地域の生産量と年間生産額1000ペソ以上の甘蔗農場=製糖所を比較すると, 同上規模の農場が西ネグロスとパンパンガに集中し, イロコス2州では全く見られず, またパンガシナンではその数が生産量に比べて少ないことがわかる。

そこで第2表によって同上規模の農場の経営形態を概観すると, 総数1075の農場の賃労働者数は4万5247人であり, 1農場当り平均では42人となる(常雇・臨時雇の割合は不明)。したがって, 同表からともかく20世紀初頭のフィリピンに賃労働者雇用を基調とする経営が存在したこと, またそれが西ネグロス, パンパンガ両州に集中したことが推測される。さらに両州の経営規模を比較してみると, 西ネグロスの1甘蔗農場平均生産額はパンパンガのその2.4倍, 資本, 賃労働者数は各々1.7倍であるが, 両州の1甘蔗農場平均賃金総額はほぼ同額であった。これは, 西ネグロスの同上規模甘蔗農場=製糖所労働者の1人当り平均賃金(月額)がパンパンガのその5分の3にすぎないためである。この西ネグロスの低賃金は, 同州で賃労働者雇用に基づく経営が発展した一要因であろう。

以上述べたことから, 19世紀後半に糖業の拠点が中部ルソンからネグロス島に移行する過程で, 刈分小作制と並んで賃労働制が無視できない規模で発展したことが概観された。次節ではネグロス島の糖業形成過程をたどり, 刈分小作制から賃労働制への移行を追跡する。

(注1) 池端 前掲論文 86ページ。

(注2) 以下の記述は特に注のない限り, de Mas, S., *Informe sobre el estado de las islas Filipinas en 1842*, Madrid, 1843, Tom. 1, "Agricultura," pp. 19—25; Buzeta, Manuel, y Felipe Bravo, *Diccionario geográfico, estadístico, histórico de las islas Filipinas*, Madrid, J. C. de la Peña, 1851—52, Tom. 1, pp. 187—193 に依拠する。

(注3)

地主の農場経営費(年額)負担分試算¹⁾

甘蔗作付面積2キノン(1 quinon=2.795 ha)の場合(単位: ペソ)

固定設備の減価償却費	22 ps.
固定設備費	
圧搾機一式	200 ps.
水牛 10頭	140 ps.
倉庫	100 ps.
	440 ps. × 5% ²⁾
運転資金	144 ps. 6 rs. 13 mrs.
賃金	
牛飼育	24 ps.
砂糖職人	83 ps. 2 rs. 13 mrs.
植苗費	12 ps. 4 rs.
砂糖用瓶20個	25 ps.
総 額	166 ps. 6 rs. 13 mrs.

(出所) de Mas, S., *Informe sobre el estado de las islas Filipinas en 1842*, Madrid, 1843, Tom. 2, "Agricultura," p. 20; Buzeta, Manuel, y Felipe Bravo, *Diccionario geográfico, estadístico, histórico de las Filipinas*, Madrid, J. C. de la Peña, 1851—52, Tom. 1, p. 191 より作成。

(注) 1) 当該農場の砂糖生産量は400ピクル(1 picul=63.25kg), うち200ピクルが地主の取得分とされ, その販売額は500ペソであった。

2) 原典による減価償却率。

(注4) Larkin, J. A., *The Pampangans: Colonial Society in a Philippine Province*, Berkeley, University of California Press, 1972, p. 81.

(注5) 前記2史料では小作料が金納か物納か不明確であるが、パンパンガの甘蔗作小作農の場合、金納であった。*Ibid.*, p. 82.

(注6) 教団アシエンダ、インキリナート制については、McLennan, M. S., "Land and Tenancy in the Central Luzon Plain," *Philippine Studies*, Vol. 17, No. 4 (Oct. 1969), pp. 676—677; 池端雪浦「フィリピン社会の経済変化と革命」(『世界歴史 21』岩波書店 1971年), 100—101ページを参照。

(注7) 以下の記述は、de Mas, *op. cit.*, Tom. 2, "Agricultura," pp. 21—24を参照。

(注8) Buzeta y Bravo, *op. cit.*, Tom. 1, pp. 189—190.

(注9) *Ibid.*; Quirino, *op. cit.*, p. 20.

(注10) 同州の蒸気動力圧搾数は1870年に31台、1899年に177台となった。Larkin, *op. cit.*, p. 70.

(注11) de Comyn, T., *Las Islas Filipinas, Progresos en 70 años*, ed. J. E. del Pan, Manila, 1878, pp. 224—225.

(注12) 1870年の統計によれば、パンパンガとネグロスの砂糖生産量は各々、21万ピクル、2万ピクルであった。しかし同統計にみる両地域の甘蔗作付面積はともに2万ヘクタールを越えており、また後述のようにネグロス島の砂糖生産量は1860年代初頭に4万ピクル、1875年に30万ピクルに達していたことから、ネグロス島の糖業は1870年代をへてパンパンガのそれを大きく凌いでいったと考えられる。de la Cavada y Méndez de Vigo, A., *Historia geográfica, geológica y estadística de Filipinas*, Manila, Ramirez y Giraudier, 1876, Tom. 1, pp. 163, 366, Tom. 2, pp. 180, 379.

(注13) *Census of the Philippine Islands: Taken under the Direction of the Philippine Commission in the Year 1903*, Washington, U. S. Bureau of the Census, 1905, Vol. 4, p. 29. (以下 *Census: 1903* と略記)。

III ネグロス島の甘蔗アシエンダの形成過程

1834年のマニラ開港がフィリピンを先進資本主

義諸国の従属的農業国として位置づけたとすれば、1855年のイロイロ港開港は西ビサヤの地方経済を再編する契機となった。それまでパナイ島で栄えた伝統的織物業の発展の道が大きく歪められたのと対照的に、ネグロス島の糖業が急速に発展したからである(注1)。本節では、1855～69年にイロイロ在住のイギリス副領事を務めたN・ロニー(Nicholas Loney)の書簡(注2)、スペイン人R・エチャウス(Robustiano Echaúz)による『ネグロス島覚書』(1894年)(注3)、そして政治史に関する最近の研究であるM・ロメロ(Ma. Fe Hernaez Romero)『二大外国勢力間の西ネグロス(1888—1909年)』(1974年)(注4)等に依拠して、ネグロス島の糖業発展を跡づけることにする。

1. イロイロ港開港後のネグロス島における砂糖生産の発展

ネグロス島は19世紀前半までスペインの住民統治が東西両海岸の一部を除いてほとんど行き届かず、また商品作物生産もきわめて微弱であった(注5)。ところがイロイロ港が開港されると、ラッセル & スタージス商会(Russel & Sturgis Co.), ロニー & カー商会(Loney & Ker Co.)に代表される欧米系商会が同港に進出し融資を開始したので(注6)、パナイ島イロイロ州の織物商人であったメスティーゾ(mestizo)(注7)がネグロス島に移民し、すでに同島に移民していたスペイン人とともにアシエンダを形成した(注8)。

この間フィリピン政庁はネグロス島の開発に乗り出し、住民統治政策を促進して次々と町(プエブロ=pueblo)を建設した(注9)。こうして1849年にわずか11であった行政単位としての町の数(注10)は翌年に17に増加し、その後アシエンダの形成に伴って町数は増加の一途をたどったのである(第3表)。他方登録人口も、隣島パナイ、セブ、ボホー

ルの住民がネグロス島に移住し^(注11)、またネグロス島の村落(自然村)が町に組み込まれていくにつれて増加した^(注12)。第3表によれば、1850年に3万人であった人口は1880年には20万人となり、さらに1893年には30万人を突破している。とくにアシエンダが集中した西海岸にはパナイ島イロイロ州からの移民が多く、彼らがアシエンダの主たる労働力を提供したのである^(注13)。しかし、急激なアシエンダの形成によって土地を囲い込まれた小農もあり、彼らはアシエンダの小作農として甘蔗栽培に携わるようになった^(注14)。ネグロス島がわずか半世紀に未開の島から一躍フィリピン有数の砂糖地帯に変貌した経済的背景には、欧米系商会の融資、スペイン人、メスティーソによるアシエンダの形成、および主としてパナイ島からの移民に示されるような資本、土地、労働力の3要素の存在があったのである。

ここで第3表からイロイロ港開港後のネグロス島の発展を確認すると、砂糖生産は19世紀後半を通じてほぼ一貫して増大を続けたことがわかる。1850年にわずか190トンであった生産量は1875年にその10倍に増加、さらに1893年には11万

4000トンとなり半世紀間に60倍に増加した。もっとも1885年には西ヨーロッパ甜菜糖業の発展による糖価下落の影響^(注15)を受けて生産量の増加率は鈍化したが、その後1885～93年の8年間の増加量は1850～85年の35年間のそれを上まわる膨大なものであった。したがって、フィリピン糖業の形成・発展過程との関連で1850～80年代始めをネグロス島の糖業形成期とすれば、1880年代後半から1890年代末までをその発展期、革命期の混乱で生産が停滞した1899年^(注16)から1909年までを低迷期と位置づけることができよう。

こうした砂糖生産の発展とあいまって、食糧作物である米・とうもろこしの生産量も増加した。しかし、米の生産量は1880年に66万カバンに達したものの1893年には43万カバンに減少しており、同期間に砂糖生産量が急増したのと対照的である。後述のようにアシエンダでは甘蔗の他に米等が作付されており、輸出商品である砂糖の生産が発展するにつれてアシエンダの甘蔗作付面積が拡大し、自給用の米の作付面積が減少していったことが予想される^(注17)。この意味で、19世紀後半のネグロス島の砂糖生産は米生産を縮小させるに十

第3表 ネグロス島の主要作物生産量・人口・町数(1850～1903年)

年 別		1850	1855	1861	1875	1880	1885	1893	1903
人 町	口 数	30,000	—	—	—	200,000	—	320,606	509,766
		17	—	—	—	30	—	42	58
作 物 生 産 量									
砂糖(ロング・トン)		190	380	2,530	18,975	39,096	50,600	113,850	93,057
米 (カバン) ¹⁾		10,000	—	—	—	659,300	—	430,000	881,023
とうもろこし(カバン)		2,000	—	—	—	153,840	—	200,000	268,177
マニラ麻(ピクル)		—	—	—	—	12,322	—	16,740	37,312
タバコ(捆)		1,000	—	—	—	4,827	—	6,317	445 ²⁾
コーヒー(カバン)		—	—	—	—	4,298	—	1,115	21

(出所) 1850, 1880, 1893年: Echaúz, R., *Apuntes de la isla de Negros*, Manila, Chofré, 1894, pp. 33—37.

1855, 1861, 1875, 1885年: Marcó, J. E., *Reseña histórica de la isla de Negros desde los tiempos remotos hasta nuestros días*, Manila, La Vanguardia, 1912, pp. 94—98.

1903年: *Census of the Philippine Islands: Taken Under the Direction of the Philippine Commission in the Year 1903*, Washington, U. S. Bureau of the Census, 1905, Vol. 2, pp. 123, 183—189, Vol. 4, pp. 325—328より集計。

(注) 1) 1カバン=75リットル。2) ロング・トン。

分な大きさであった。

ところで、この半世紀間のネグロス島における糖業の飛躍的發展に伴い、アシエンダの経営形態はどのように変化したであろうか。以下では若干の史料を手がかりに、アシエンダ経営の変化を考察する。

2. 圧搾機の改良とアシエンダ経営の形態変化

ネグロス島におけるアシエンダの製糖所(camarrin)は、砂糖生産の発展とともに大型化の過程をたどった。第4表によると当時の圧搾機には木製、鉄製畜力、蒸気動力、水力の4種類があり、その数からみて1850年代～60年代には木製、1860年代～70年代には鉄製畜力、1880年代～90年代には木製と蒸気動力が隆盛であった。これら4種の圧搾機では各々1農業年平均砂糖生産量が異なり、木製の場合25～30トン(前述)、鉄製畜力は後述のようにその3倍、そして蒸気動力・水力の場合は約300～500トンに達したのである。したがって

第4表 ネグロス島の圧搾機・その他固定設備台数
(1850～93年)

年 別	1850	1870	1880	1893
木製圧搾機	7	65	33	500
鉄製畜力圧搾機	—	98	495	500
蒸気動力圧搾機	—	3	59	274
水力圧搾機	—	5	17	47
総 数	7	171	604	1,321
蒸気耕作機	—	—	—	3
甘蔗運搬軌道	—	—	—	23 ¹⁾

(出所) 1850, 1880, 1893年: Echaúz, R., *Apuntes de la isla de Negros, Manila, Chofré*, 1894, pp. 33—37. (1880, 1893年の木製圧搾機数は Hernaez Romero, Ma. Fe, *Negros Occidental between Two Foreign Powers (1888-1909)*, Manila, Enterprise Publications, 1974, p. 40より。ただしその典拠は不明)。

1870年: de la Cavada y Méndez de Vigo, A., *Historia geográfica, geológica y estadística de Filipinas*, Manila, Ramirez y Giraudier, 1876, Tom. 2., p. 179.

(注) 1)設置箇所数を示す。

1880年代後半から1890年代にいたる糖業発展は、主として蒸気動力・水力圧搾機数の増加によるものであったといえよう。

エチャウスの『覚書』によりイロイロ港開港前の経営形態をみると、1849年には四つのアシエンダで砂糖が生産され、その経営規模は小さく、もっぱら木製圧搾機と旧式な炉に依存していた。(当時の1アシエンダ当り平均砂糖生産量は40～50トン前後と概算される)(注18)。ところがロメロによれば、中部ルソンのパタンガスで技術改良に努めたフランス人技師(前述)の1人が1847年に西ネグロスに移住し、すでに「節約炉」を設置していた(注19)。そして労働力を確保するために、彼は町や村落(バリオ=barrio)の役人に大砲を寄付して協力を要請したのである(注20)。エチャウスは1854年にスペイン人が「節約炉」を導入したとしており(注21)、上記のロメロの説とは食違う。

それはともかく、ここで開港前のアシエンダ経営について整理すると、第1に、アシエンダの所有者であるアセンデーロ(hacendero)が自ら経営に従事していたこと。第2に、砂糖生産の規模が小さいことから、当時のアシエンダでは米等の生産がむしろ主流であったこと(注22)。第3に、前述の中部ルソンにおける木製圧搾機設備農場では地主・小作経営が支配的であり、また後述のように1860年代のアシエンダに小作農が存在したことから、1840年代～50年代前半のネグロス島のアシエンダでは地主・小作経営が行なわれていたことが推測される。

ところがイロイロ港が開港されると前述のように欧米系商會が設立され、資金に乏しいアセンデーロに対する融資が始まった。当時商會は、経営資金、機械設備・農機具購入資金の前貸しを行なったので、アセンデーロは普通、機械類の6～7割を商

会の融資で設備し^(注23)、砂糖をもって借金を返済したのである^(注24)。こうして1857年にわずか1台であった鉄製畜力圧搾機は、1861年になると13台に増加した^(注25)。ロニーは1861年の書簡で、当時のアシエンダ経営について次のように述べている。

「(小作農〈アクサ=acsa〉は、)地主から家畜と農具を支給され、製糖所への甘蔗の運搬を含む一切の甘蔗栽培を請け負い、利益の何割かを分け前として受取る。そして製糖費は地主が負担する。しばしば異なる契約がアクサと結ばれるが、一般にネグロスでは、あらかじめ、もしくは製糖期に1製糖労働日(sugar day)に対するおおよその価格が定められる。たとえば1ピクル2ドルとして、彼らは総額の半分を取得するのである。地主は残余分を確保し、地方商人や仲買人に売却したりイロイロに運搬して販売した時に、砂糖のままで得た割増分を現金化するが、それはしばしばかなりの額にのぼった。鉄製畜力圧搾機が導入されたエステート(estates)では普通、所有者に対する補償として小作農の利益は9~12%削減される。」^(注26)

以上の記述から、1850年代~60年代のアシエンダで刈分小作制が存在したことが確認される。しかし1860年代初頭の鉄製畜力圧搾機の導入によって、地主・小作間の収穫物分配率は変化していたのである。輸入製糖設備の採用によって甘蔗圧搾率が旧来の2倍弱、単位面積当りの砂糖生産量が2~3倍になったために収益率が増加したが、その結果生じた利益はアセンデーロの取得分となった^(注27)。その上、小作農に農具を支給し、甘蔗をトン単位で買い付ける方式を考案するアセンデーロもあったという^(注28)。これらの事実は、イロイロ港開港後に製糖設備が拡大し砂糖生産が発展した結果、アシエンダの中心的生産活動が米生産から砂糖生産へ移行したことを示唆する。そして収益

率の増加によって利するのはアセンデーロのみで、小作農はその利益にあずかることなく相対的に零落していったと考えられる。

こうして旧来の地主・小作関係が変化する一方、隣島パナイからの移民によってアシエンダの労働力が増強されていったのであろう。ロニーは同上書簡において、居住・季節労働者の区別こそ不明確であるがネグロス島の農業労働者に言及する他^(注29)、1867年の書簡では出稼ぎで来島したパナイの住民で帰郷しない者の数が9000人に達すると述べている^(注30)。以上のことから筆者は、1860年代のネグロス島では出稼ぎ労働者が重要な存在となっており、その定着化を主たる契機として刈分小作制から賃労働制への移行が徐々に始まったと推測するのである。

ところで1860年代~70年代に変化しつつあったアシエンダ経営は、1880年代になって大きな転換期を迎えた。1880年代~90年代には鉄製畜力圧搾機が横ばいであったのに対し、その他の木製・蒸気動力・水力圧搾機が増加したからである^(注31)。とくに蒸気動力・水力圧搾機を設備すると1農業年に1台当りで300~500トン、あるいはそれ以上の砂糖生産が可能となり、1アシエンダ当りの甘蔗作付面積は80~100ヘクタールに拡大した^(注32)。こうした製糖設備の大型化に伴って、アシエンダの小作農はますます零落し、その多くが賃労働者に転化したと思われる。また隣島からの移民が定着して居住労働者となり、これら労働者の管理は彼らの中から輩出した親方(cabo)に託されたのであろう。そして労働者数の増加に伴い、アセンデーロに代わって作業の監督を行なう管理人(encargado)が出現し、また収穫期に出稼ぎ労働者を確保する請負人(contratista)が必要とされたであろう。

J・フォアマン(John Foreman)の『フィリピン諸

島』(第2版, 1899年)によれば, 中部ルソンの大規模な甘蔗農場 (plantation) では刈分小作制が一般的であるが, ネグロス島では賃労働制が支配的であった^(注33)。またエチャウスは1890年代初頭のアシエンダ経営を記述し, アセンデーロ, 管理人, 親方, 賃労働者の関係に言及している^(注34)。上記2史料では賃労働者の性格規定が曖昧ではあるが, 19世紀末のネグロス島で賃労働者雇用を基調とするアシエンダ経営が成立していたことが確認される。したがって筆者は, 1880年代~90年代にかけてアシエンダにおける刈分小作制から賃労働制への移行は決定的となったと考え, この時期に資本主義的なアシエンダ経営——資本・賃労働関係を基本的生産関係とする——^(注35)が成立したと設定するのである。この1880年代~90年代は西ヨーロッパ甜菜糖の過剰生産に端を発した糖価下落期であり, 同時期にみるアシエンダ経営の資本主義化は糖業合理化の一形態だったといえよう。ただし, ネグロス島のアシエンダ経営に関する以上の議論はあくまでも乏しい史料に依拠した筆者の仮説であり, 今後の史資料発掘によって再構成されねばならない。

(注1) Legarda, *op. cit.*, pp. 272—275.

(注2) “Trade in Panay, 1857—67; Four Letters by Nicholas Loney,” in R. MacMicking, *Recollection of Manila and the Philippines during 1848, 1849, 1850*, Manila, Filipiniana Book Guild, 1967.

(注3) Echaúz, R., *Apuntes de la isla de Negros*, Manila, Chofré, 1894.

(注4) Hernaez Romero, Ma. Fe, *Negros Occidental between Two Foreign Powers (1888—1909)*, Manila, Enterprise Publications, 1974.

(注5) Echaúz, *op. cit.*, pp. 11—12; 池端「フィリピン社会……」101—102ページ。

(注6) 滝川勉「フィリピン土地制度史序説」(『農業総合研究』第17巻第1号 1963年1月) 29—30ページ; Romero, *op. cit.*, pp. 37—38.

(注7) メスティーソとはフィリピン人とスペイン人もしくは中国人との間に生まれた混血児である。ちなみに1850年のイロイロ州のメスティーソ数は, スペイン系が470人, 中国系が663人であった。Buzeta y Bravo, *op. cit.*, Tom. 2, p. 106.

(注8) “Loney to Farren, 1861,” MacMicking, *op. cit.*, pp. 247—248. スペイン人やメスティーソは国王領の私下げ, 住民からの土地購入, 買戻し契約等によってアシエンダを取得したが, 実際それらは土地横領というべき方法であった。Bauzon, *op. cit.*, pp. 7, 20—21.

(注9) Echaúz, *op. cit.*, pp. 11—21.

(注10) *Ibid.*, pp. 11—12.

(注11) Romero, *op. cit.*, pp. 31, 48—49. とくにバナイ島イロイロ州では, 商業中心地一帯でかなり貨幣経済が浸透していたと推測させる記述が多い。“Loney to Farren, 1857,” MacMicking, *op. cit.*, pp. 209—241.

(注12) Echaúz, *op. cit.*, pp. 14—21. スペイン統治下フィリピンの自然村バランガイ (barangay) は一般に, 町 (pueblo) に統合されてバリオ (barrio) と呼ばれるようになった(Phelan, J. L., *The Hispanization of the Philippines*, Madison, University of Wisconsin Press, 1959, pp. 124—125)。ここでは19世紀ネグロス島の村落社会についての考察はできないが, エチャウスの記述から同島の村落再編過程が若干推測される。たとえば1890年代初頭のネグロス島では, 「西部北方」「西部南方」「東部北方」の三つの司教代理管区 (vicaria) における砂糖生産量は2万2000トンであった(砂糖生産が最も発展した西海岸中央部は同上諸管区に含まれない)。人口は16万9000人と記録され, このうち「納税者」(almas) が6万6000人, 「未納税者」(indocumentados) が5万5000人, 「異教徒」(infieles) が4万8000人であったという (Echaúz, *op. cit.*, Capitulo 14)。したがって, 19世紀前半までのネグロス島には行政町内に組み込まれていない自然村が多数存在し, それが同世紀後半のアシエンダの形成に伴って次第に行政単位として再編成されていったと思われる。

(注13) Romero, *op. cit.*, p. 49.

(注14) Bauzon, L. E., *Philippine Agrarian Reform, 1880—1965*, Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, Occasional Paper, No. 31, 1975, pp. 4—5.

(注15) Marcó, J. E., *Reseña histórica de la isla de Negros desde los tiempos remotos hasta nuestros días*, Manila, La Vanguardia, 1912, p. 96.

(注16) ネグロス島ではフィリピン革命期にアセンドーロ対労働者・小作農の階級対立が激化し、1899年頃からアシエンダの焼討ちが始まり、1902年の甘蔗作付面積は1898年のわずか5分の1となった。Constantino, R., *The Philippines: A Past Revisited*, Manila, Tala Publishing Services, 1975, pp. 270—274.

(注17) 1890年代初頭にネグロス島の米不足分がサイゴンから輸入され、その量は年間約3000トンに達した。Marcó, *op. cit.*, p. 97.

(注18) Echaúz, *op. cit.*, pp. 22—23.

(注19) Romero, *op. cit.*, p. 34.

(注20) *Ibid.*

(注21) Echaúz, *op. cit.*, p. 24.

(注22) Dept. of Labor and I. C. A., *Employment of Migrant Labor (Sacadas) in the Sugar Industry in Negros Occidental*, Manila, 1956, p. 5.

(注23) Perez, Miguel et al., *Cronica sem-historia de Filipinas y en especial de las Yslas Visayas desde 1877 à 1887*, Manila, 1881, p. 1 (manuscrito).

(注24) *Census: 1903*, Vol. 4, p. 29.

(注25) “Loney to Farren, 1861,” MacMicking, *op. cit.*, p. 246.

(注26) *Ibid.*, p. 251.

(注27) *Ibid.*, pp. 250, 252.

(注28) *Ibid.*, pp. 251—252.

(注29) *Ibid.*, p. 251.

(注30) “Loney to Farren, 1867,” MacMicking, *op. cit.*, p. 272. なお移民はアセンドーロから自給用の土地を与えられた。Dept. of Labor, *op. cit.*, p. 5.

(注31) 19世紀末のアシエンダ経営と木製圧搾機との関連については、むすびにおける筆者の問題提起をみよ。

(注32) Echaúz, *op. cit.*, pp. 149—150; Foreman, J., *The Philippines*, 2nd ed., Shanghai, Kelly & Walsh, 1899, pp. 311, 315.

(注33) *Ibid.*, pp. 314—316.

(注34) Echaúz, *op. cit.*, pp. 73—75.

(注35) その具体的内容については後述する。なお、アシエンダの所有者は経営者をも兼ねたことから、

アシエンダ経営は地主＝資本家経営と規定されよう。

IV ネグロス島の甘蔗アシエンダ経営の分析

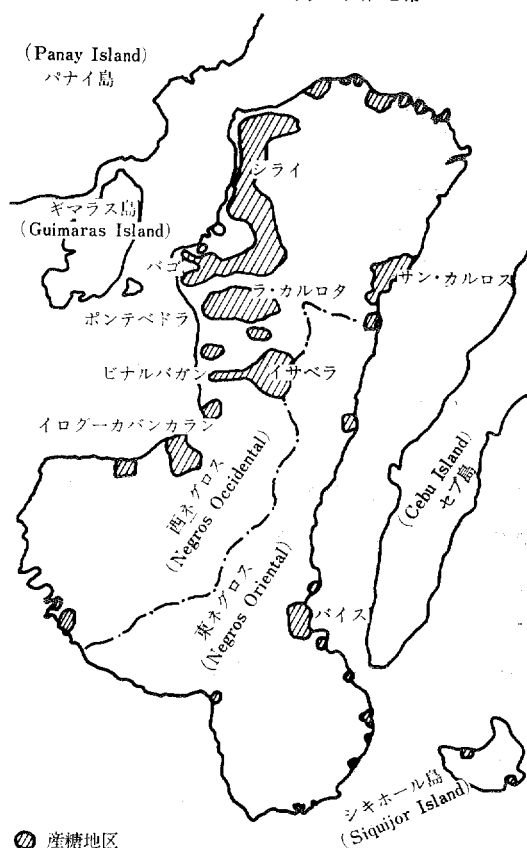
1. 甘蔗アシエンダの分布

前述のようにネグロス島の糖業はイロイロ港開港後飛躍的に発展し、西海岸を中心として砂糖地帯 (sugar belt) が形成された。その後フィリピン革命によって同島の砂糖生産は停滞したが、20世紀初頭に回復のきざしが現われた^(注1)。H・ウォーカー (Herbert S. Walker) 『ネグロス島の糖業』^(注2) (1910年) は、回復途上にあった同島の糖業を考察する上できわめて有益な資料を提供している。これはペイン・オルドリッチ関税法制定直前の1908～09年に施行された甘蔗アシエンダの生産形態に関する調査報告で、同調査はアメリカ植民地政府下の科学局 (Bureau of Science) が推進したものである^(注3)。

調査当時の西ネグロスには、海岸に沿って北はビクトリアス (Victorias) から南はイログ (Ilog) まで、全長130キロメートル、幅5～30キロメートルに及ぶ砂糖地帯が形成されていた。この砂糖地帯は、各々年間5000トン以上の砂糖を生産する5地区——シライ (Silay), バゴ (Bago), ポンテベドラ (Pontevedra)—ラ・カルロタ (La Carlota), ビナルバガン (Binalbagan)—イサベラ (Isabela), イログ (Ilog)—カバンカラン (Cabancalan)——に分割される。さらに東海岸には西ネグロス州に属するサン・カルロス (San Carlos), 東ネグロス州唯一の産糖地区バイス (Bais) があり、両地区でともに年間5000トンの砂糖が生産された^(注4)。

さて、これら7地区を中心にアシエンダの分布をまとめたのが第5表である。同表によると1908年の甘蔗アシエンダ数は484で、そのうち90%が

第2図 ネグロス島の砂糖地帯



● 産糖地区

(出所) Walker, H. S., *The Sugar Industry in the Island of Negros*, Manila, Bureau of Printing, 1910, 巻頭図より。

西ネグロスに集中している。地区別では、シライ地区がアシエンダ数、砂糖生産量においてともに全体の20~30%を、次いでポンテベドラーラ・カルロタ地区が全体の10%を占めている。ところが1アシエンダ当りで見ると、サン・カルロス、イログ地区の砂糖生産量はシライ地区の3.5倍であった。

ウォーカーは、1860年代から開拓されたシライ地区ではすでに土地の疲弊が顕著なこと(注5)、また新植、株出という甘蔗栽培方法の相違により単位面積当りの収穫量に大きな格差が生じること(注6)に触れている。しかし筆者は、前述の蒸気動力・

水力圧搾機と木製・鉄製畜力圧搾機にみる圧搾能力の著しい相違が、このような地域的格差と大いに関連があると思う。ポンテベドラ、サン・カルロスそしてイログ地区の1アシエンダ当りの砂糖生産量は250~300トン以上であり、これらの地区では蒸気動力・水力圧搾機が設置された場合が多いと考えられるからである。ただし、ここではこれ以上地域的格差に立入ることはできない。以下、圧搾機動力別に経営形態を概観してみよう。

2. 甘蔗アシエンダの経営規模

1903年センサスによれば、1902年の西ネグロスにおける年間生産額1000ペソ以上の甘蔗農場=製糖所数は531であり、圧搾機別では蒸気動力が291台、水力が45台、畜力・手動が195台であった。東ネグロスの場合、同上規模の甘蔗農場=製糖所数は38であり、圧搾機別では蒸気動力が32台、畜力・手動が6台であった(注7)。東西両州ともに、蒸気動力圧搾機が大きな比重を占めたのである。

つぎに圧搾機動力別に甘蔗農場の経営をみると(第6表)、東西両州ともに蒸気動力・水力圧搾機設備農場が、畜力・手動の場合に比べて圧倒的に規模が大きい。西ネグロスを例にすると、蒸気動力圧搾機設備農場の規模は畜力・手動圧搾機設備の場合に比べて約3~4倍である。20世紀初頭のネグロス島、とくに西ネグロスでは、蒸気動力圧搾機設備農場を中心として賃労働者雇用を基調とする経営が成立していたといえよう。したがって、これから蒸気動力圧搾機設備の甘蔗アシエンダについて、その経営形態を把握することにする。

ウォーカーは調査報告の中で、農場面積が150ヘクタール、作付面積が100ヘクタール、年間砂糖生産量が379.5トンの甘蔗アシエンダをそのモデルとして設定した(注8)。第7表は、ウォーカーが示すアシエンダの経営費を筆者なりにとりまと

第5表 ネグロス島の甘蔗アシエンダ分布とアシエンダの経営規模(1908年)

		州 別 ・ 地 区 別 総 数						1 アシエンダ平均 ²⁾				
		アシエンダ ¹⁾ 数	農場面積		作付面積		砂糖生産量		農場面積 ha	作付面積 ha	砂糖生産量 トン	1 ha平均砂糖生産 量 トン
			ha	%	ha	%	トン	%				
西 シ バ ボンテベドラー ビナルバガン イロダーク サン・カルロス その他	450	61,792	94.1	24,748	91.3	66,661	90.7	137.3	55.0	148.1	2.7	
	143	19,612	29.9	6,676	24.6	15,585	21.2	137.2	46.7	96.3	2.3	
	42	5,426	8.3	2,555	9.4	5,293	7.2	129.2	60.8	126.0	2.1	
	47	8,740	13.3	2,737	10.1	12,027	16.4	185.9	58.2	255.8	4.4	
	43	5,825	8.9	2,957	10.9	6,723	9.2	135.5	68.8	156.4	2.3	
	22	2,489	3.8	1,632	6.0	7,260	9.9	113.1	74.2	330.0	4.4	
	14	2,946	4.5	2,080	7.7	4,825	6.6	210.5	148.6	344.7	2.3	
	139	16,754	25.5	6,111	22.6	14,948	20.3	120.5	44.0	107.5	2.5	
	東 バ グ イ の その他	34	3,849	5.9	2,348	8.7	6,801	9.3	113.2	69.1	200.0	2.9
18		2,845	4.3	1,688	6.2	4,825	6.6	158.1	93.8	268.8	2.9	
16		1,004	1.5	660	2.4	1,976	2.7	62.4	41.3	123.5	3.0	
合 計		484	65,641	100.0	27,096	100.0	73,462	100.0	135.6	56.0	151.8	2.7

(出所) Walker, H. S., *The Sugar Industry in the Island of Negros*, Manila, Bureau of Printing, 1910, p. 17.

(注) 1) ウォーカーは「栽培者」(growers)と記入。2) 州別・地区別総数より算出。

第6表 ネグロス島における甘蔗農場の製糖所(年間生産額1000ペソ以上)¹⁾
動力別経営形態(1902年)

州別	圧搾機動力別	1 甘蔗農場 = 製糖所平均 ²⁾							
		資本 ³⁾ (ペソ)	生産額 (年間) (ペソ)	賃金 (年間) (ペソ)	賃労働者数 ⁴⁾ (月平均)			賃金 (1人当り平均)	
					合計(人)	男子(人)	女子(人)	男子 (ペソ)	女子 (ペソ)
西ネグロス	蒸気動力	28,806	12,230	6,578	72.5	67.2	5.4	7.8	5.0
	水畜力	25,334	11,295	6,459	65.8	59.1	6.6	8.5	5.8
	動力・手動	8,547	2,959	1,913	24.7	22.4	2.3	6.6	4.8
東ネグロス	蒸気動力	27,648	9,928	6,658	63.4	61.7	1.8	8.9	5.1
	水畜力・手動	5,774	1,317	1,024	15.5	15.2	0.3	5.6	2.5

(出所) *Census of the Philippine Islands: Taken under the Direction of the Philippine Commission in the Year 1903*, Washington, U. S. Bureau of the Census, 1905, Vol. 4, pp. 528—531より作成。

(注) 1) 第1表の(注)1)をみよ。2) 州別総計に基づき算出。3) 具体的内容は不明。4) 農・工を含む。

めたものである。

同表によれば、固定設備費3万4000ペソのうち製糖設備が40%、次いで建物費と家畜費が各々20%を占めている。とくに製糖設備の70%以上が蒸気動力圧搾機の購入に当てられ^(注9)、設備に占める圧搾機の比重はきわめて大きい。これに対し運転資金では、総額1万6000ペソのうちの60%が賃金である。前述のように西ネグロスの糖業労働者1人

当たり平均賃金(年間生産額1000ペソ以上の甘蔗農場)がパンパンガのその5分の3であったことを、この運転資金に占める賃金の比重の大きさに照らしてみると、西ネグロスの低賃金は同州の賃労働制に基づくアシエンダ経営を支える一要因として把握されよう。

さらに賃金の内訳をみると(第8表)、管理層が全体の23%、直接生産者が77%を占めている。管

第7表 150ヘクタール規模の甘蔗アシエンダ(作付面積100ヘクタール)における年間生産コスト試算

年間砂糖生産量379.5トン(「上質糖混合」)			(単位: ペソ)
固定設備の減価償却費		3,405	
製糖設備	13,900		
製糖所	2,000		
倉庫	1,500		
管理人、監督用住宅	2,000	34,050	
労働者用住宅40戸	1,600	×10% ¹⁾	
家畜50頭@ 135ペソ	6,750		
運搬軌道	3,500		
農具	1,800		
荷車20台@ペソ	1,000		
運 転 資 金		15,762	
賃金(管理層を含む) ²⁾		9,844	
運送費(イロイロ港まで)		3,180	
原 材 料 費		1,778	
管理層の生活費(月額80ペソ)		960	
総 額		19,167 ³⁾	

(出所) Walker, H. S., *The Sugar Industry in the Island of Negros*, Manila, Bureau of Printing, 1910, pp. 88—89, 113—114, 123, 125, 128 より作成。

(注) 1) ウォーカーによる減価償却率。

2) 直接生産者の賃金総額は各作業部門別に1ピクル当たりで計上されたものを基礎に算出。なお、前払金として3000ペソが準備された。

3) 1909年11月1日から5カ月間の平均市場価格は「上質糖混合」の場合、1ピクル当たり7125ペソであり、379.5トンの販売総額は4万2750ペソとなる(ただし、これはバイン・オールドリッチ関税法制定後)。

理層の賃金は直接生産者のそれに比べて高額であるが、とくに管理人が高給所得者である。このほか管理層には生活費が支給されたが、とくに管理人には収穫期に純益の数パーセントのボーナスが与えられた(注10)。他方直接生産者の賃金は、甘蔗栽培・製糖工程の労働者の場合、日払いで1日当たり0.4ペソ、また刈取り・運搬の場合は出来高払いであったが、その平均額は日払い賃金に匹敵した(注11)。なお労働者は普通、賃金の他に米の配給(ration)を受けていた(注12)。したがって当該アシエンダでは、甘蔗栽培に約40人、刈取り・運搬に約60人、製糖に65人の労働者を必要としたと推計

第8表 賃金(年額)試算内容 (単位: ペソ)

管理層の月給	2,280
管理人1人(月額100ペソ)	1,200
監督(スペイン人)1人(月額50ペソ)	600
親方(フィリピン人)2人(月額20ペソ)	480
直接生産者の日給・出来高給	7,564
甘蔗栽培 ¹⁾ (日給)	3,580
刈取り・運搬(出来高給)	1,920
製糖(日給)	2,064
総 額	9,844

(出所) Walker, H. S., *The Sugar Industry of the Island of Negros*, Manila, Bureau of Printing, 1910, pp. 88—89, 113—114, 123, 125 より作成。

(注) 1) 作付面積100ヘクタールのうち、半分が新植、残り半分が株出。

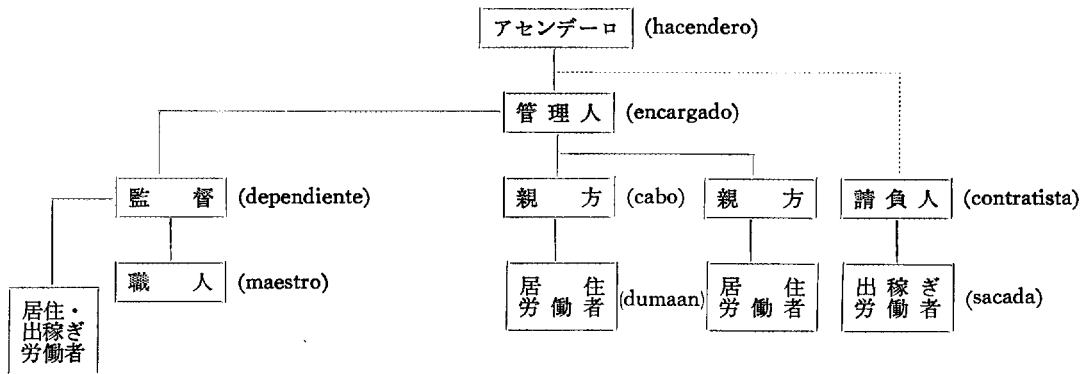
される(注13)。

最後に土地についてふれると、開拓当初ネグロス島の地価は1ヘクタール当たり5～10ペソといわれたが(注14)、当該アシエンダの地価は1ヘクタール当たり100ペソ(注15)であり、糖業発展下での地価高騰がうかがわれる。なお当該アシエンダでは、土地や固定設備の購入に5万ペソを要し、その資金返済に10年間を当てている(注16)。当時の主たる融資機関は欧米系商会であったので、こうしたアシエンダ経営は商会の融資を前提として成立したのである。つぎに上述の生産コスト・賃金試算をひとつの手がかりとして経営組織を考察し、階級関係把握の一助としよう。

3. 甘蔗アシエンダの経営組織

第3図はウォーカーの調査報告を基礎に、前掲エチャウスの『覚書』とフォアマンの著書を補助材料としてアシエンダの経営組織を図式化したものである(注17)。当該アシエンダには約40人の居住労働者がおり、5～10月の農閑期と11月～翌年4月の収穫期＝製糖期を通じて、彼らは親方や監督の下で甘蔗栽培・製糖作業に従事する。ただし、収穫期＝製糖期は11月から翌年4月までのうちの

第3図 甘蔗アシエンダの経営組織



約3カ月で、この間には80~100人の季節労働者が必要とされたが、その大半は出稼ぎ労働者であった。彼らは請負人やアセンデーロの代理人に率いられてアシエンダに集まり、主として刈取り・運搬作業に従事したのである（作業工程については若干後述）。以下、各構成員について簡単に述べていく。

(1) アシエンダ所有者＝経営者 (hacendero)

ウォーカーによれば、アセンデーロのほとんどはスペイン人、スペイン系メスティーソもしくはフィリピン人（ビサヤ諸島民）であったが、数人のスイス人、1、2のアメリカ人、そして中国系メスティーソが時折見かけられた^(注18)。彼らの大半はアシエンダ邸宅 (casa—hacienda) に居住し、自ら経営業務に従事した。彼らは平均100~200ヘクタールの土地を所有し、このうち甘蔗作に50~100ヘクタールを当て、その他を住宅、製糖所、倉庫、家畜小屋の敷地にしたり、米等の作付地に利用した。アセンデーロは主として欧米系商会から融資を受け、経営資金、機械購入資金を調達したが、地元商人＝高利貸に依存する者も多かった^(注19)。

F・バローナ (Francisco Varona) 『ネグロス島の

歴史と人々』(1938年)によれば、有力なアセンデーロの中には商人＝高利貸を兼ねる者がおり、彼らは砂糖をアセンデーロから買い付け、それを商會に売却する仲買業を営んだ。資金不足に陥ったアセンデーロは彼らから前借りしたが、返済不能となる者が多く、その結果19世紀末までに数十のアシエンダを所有する商人＝高利貸が出現した。このように幾つものアシエンダを経営する有力なアセンデーロが現われる一方、資金難に陥り借地経営者に転化した者が少なからず存在したのである^(注20)。

(2) 管理層

(a) 管理人 (encargado)

管理人はアシエンダに恒常的に居住し、甘蔗栽培から製糖にいたる一切の作業を監督した。もっとも管理人の下には、彼の補佐を務める監督や労働者頭である親方が配属されたので、管理人は実質上彼らに甘蔗栽培、刈取り、運搬、製糖作業の指揮を託すことになった。管理人の仕事の具体例としては、毎朝の作業開始時に自ら親方を従えて労働者の点呼を行なうほか^(注21)、時折アシエンダの必要用具をイロイロ港まで調達に出かけること^(注22)等があげられる。

管理人となった者のなかにはスペイン人やメスティーソが多く存在したと推測され^(注23)、実際アセnderoの親類が経営管理に携った例もある^(注24)。管理人の給料は監督や親方に比べてかなり高額で、その上彼らはボーナスを取得した。またエチャウスによれば、管理人はアシエンダの中で日用品、酒、タバコ等を労働者に販売し、その所得を増加させたという^(注25)。この意味で、管理人は管理層の中でもとくに親方とは異なる階層に位置していたのである。

(b) 監督 (dependiente)

管理人に次ぐ高所得者である監督の役割は、ウォーカの報告からはいっこうに明らかとならない。ただしフォアマンによれば、機械技師(製糖所監督)の賃金は親方のその5倍であること^(注26)、また農業部門の管理層としてはフィリピンの方が適切であることから、スペイン人監督は管理人の補佐を務め、製糖所の運営を担当したと考えられる。

当該製糖所の操業期間は1農業年に約3カ月、1日14時間であった^(注27)。同部門では製糖所周囲の空地でバガスを乾燥する労働者20人を含めて、65人の労働者(うち職人2人)が働いた。製糖工程は甘蔗から搾出した糖汁を5~6個の煮沸鍋に移しながら凝縮し、1個100~300キログラムの砂糖塊を製造するものである。これは若干の熟練を要する作業なので、主として居住労働者がこれに当り、出稼ぎ労働者は補助作業を行なった^(注28)。したがって監督は製糖作業が円滑に進行するよう、職人・労働者の頂点に立って各部門の作業工程を調整し、また製糖期が終わると設備の点検に当たったのであろう。彼はスペイン人であること、また作業が季節的なことから、監督・労働者間の結びつきは作業上の上下関係に終止したと考えられる。

(c) 親方 (cabo)

これに対しフィリピン人親方は、その労働者との結びつきにおいてスペイン人監督とは質的に異なる役割を担っていた。エチャウスは、規模の小さいアシエンダの親方について若干ふれている。

それによると、親方はアセnderoと労働者との間に入って賃金・前払金支払いの際に仲介の勞をとったり、労働者が病気などで働けない場合は食糧 (comida) などを与えて労働者を保護した。このように親方は労働者に対し温情的な態度で接するが、時には支配的な態度も示したのである。たとえば、アセnderoから受取る労働者用の食糧をピンハネしたり、労働者が不当な賃金要求をしたと見られる場合は彼らに体罰すら加えた。また労働力不足を解消するために、親方は休日に市場で労働者の引抜きをしたのである^(注29)。

これは管理人のいない規模の小さなアシエンダの親方について記述したもので、規模の大きいアシエンダにそのまま通用するとは思えない。しかし、親方は単なる作業上の指揮者でなく、日常生活を通して労働者と密接に結びついた存在であることは確認できる。親方はアセndero・管理人と労働者間の媒介者であり、アシエンダの経営組織の中できわめて重要な位置にあったのである。

(3) 直接生産者

(a) 居住労働者 (dumaan)

当該アシエンダの居住労働者数は40人で、彼ら全員に1家族単位で住居が与えられた。賃金は日払いで1日当り0.4ペソであったが、普通、米が配給されたほか、収穫・製糖期には賃金が割増しされた。彼らは甘蔗栽培と製糖作業に携わったが、1農業年を通して定期的に収入を得ることはできないのである。

甘蔗栽培作業^(注30)についてみると、11月から翌

年4月までの収穫・製糖作業と同時に地ならしと植付が居住労働者によって行なわれる。そしてこの間に、婦人や子供が種苗 (punta) の準備に当たる (彼女らの賃金は出来高払い)。ところが5～6月の中耕・除草期を過ぎると、7～11月までほとんど農作業は不必要となるので、居住労働者家族の賃金収入は断たれるのである。

この不規則な雇用状態においてある程度生活を安定させるために、彼らはアセンデーロと小作契約を結び、農閑期を利用してわずかな土地で米を生産した^(註31)。この結果アセンデーロは小作料として米を取得し、労働者用の配給に当てたのであろう。かくてアシエンダの居住労働者は、自給用食糧の一部を自己生産しながら甘蔗栽培に従事する労働者だったのである。

(b) 出稼ぎ労働者 (sacada)

収穫期＝製糖期には居住労働者数の2倍にも及ぶ出稼ぎ労働者が集まったが、彼らの仕事は主として甘蔗の刈取り・運搬であり、その賃金は出来高払いであった。経営管理の行き届いたアシエンダでは簡便な貨車軌道が設置されていたが、レールの距離は短く、貨車は畜力もしくは人力をその動力とした^(註32)。さらに鉄製軌道が得られない所では、荷車が使用されたのである^(註33)。こうして出稼ぎ労働者は、出来高払い制の下で刈取り・運搬の重労働に就くことになった。

彼らのほとんどは隣島のパナイやセブからの出稼ぎであったが、賃金を前借りするとそのまま逃散する例が多かった^(註34)。また出稼ぎ労働者の確保に当たった請負人も、アセンデーロから労働者に支払うべき前払金を受取った後、契約を破棄する例が頻繁にみられた^(註35)。この労働者の逃散、請負人の契約破棄を防止する唯一の手段は、請負人が収穫、積込み、運搬などの一切の作業を請負

った上で出稼ぎ労働者の作業を監督する方式——ギャング制 (gang system)——^(註36) の導入であった。だが、20世紀初頭においてこの方式が成立した例を見出すことはできないのである。

(注1) Constantino, *op. cit.*, pp. 272—274.

(注2) Walker, H. S., *The Sugar Industry in the Island of Negros*, Manila, Bureau of Printing, 1910.

(注3) *Ibid.*, pp. 7—8.

(注4) *Ibid.*, pp. 14—15.

(注5) *Ibid.*, pp. 22—23.

(注6) *Ibid.*, p. 18.

(注7) *Census: 1903*, Vol. 4, pp. 528—531.

(注8) Walker, *op. cit.*, pp. 123—125.

(注9) *Ibid.*, p. 125.

(注10) *Ibid.*

(注11) *Ibid.*, p. 92.

(注12) *Ibid.*, p. 20.

(注13) フォアマンによれば、農場面積170ha、作付面積85ha、年間砂糖生産量約570tのアシエンダの雇用労働者数 (内訳) は、管理人1人、親方4人、居住労働者40人、季節労働者100人、機械技師・副技師各1人であった。Foreman, *op. cit.*, pp. 315—316.

(注14) “Loney to Farren, 1861,” MacMicking, *op. cit.*, pp. 250—251.

(注15) Walker, *op. cit.*, p. 125.

(注16) *Ibid.*

(注17) 居住・季節労働者の原語については、1976年4月9日東京にて、筆者がパウソン氏にインタビューしたもの。また請負人の原語には、ウオーカーによる“labor-contractor”に基づき現代の呼称を付与した。

(注18) Walker, *op. cit.*, p. 19.

(注19) 以上の記述は、Romero, *op. cit.*, pp. 36—38, 等に基づく。

(注20) Varona, F., *Negros: Historia Anecdótica de su Riqueza y de sus hombres*, Manila, General Printing Press, 1938. ただし筆者が参照したのは、Raul L. Locsin による英訳 “Negros: Its History and People,” *Western Visaya Chronicle* (Jan.—Sept. 1965) である。同注に関する参照箇所は Chap. 5—6, 9—11.

(注21) Echaúz, *op. cit.*, pp. 56—57.

(注22) Foreman, *op. cit.*, p. 316.

(注23) Echaúz, *op. cit.*, p. 43.

(注24) Varona, *op. cit.*, Chap. 6.

(注25) Echaúz, *op. cit.*, p. 43.

(注26) Foreman, *op. cit.*, p. 316.

(注27) 以下の記述はWalker, *op. cit.*, pp. 92—113に基づく。なお製糖工程における機械化、道具の改良は著しく遅れていたことから、当該製糖所（蒸気動力圧搾機設備）はマニファクチュア段階の工場として位置づけられよう。この見解については、滝川 前掲論文 30ページを参照。

(注28) 前掲, インタビュー。

(注29) Echaúz, *op. cit.*, pp. 161—163.

(注30) Walker, *op. cit.*, pp. 82—90に詳しい。

(注31) 前掲, インタビュー。なお1930年代における甘蔗農場居住労働者の調査によれば、ネグロス島の労働者 120 家族のうち83家族がアシエンダ内の0.25～1ヘクタールの土地で米を生産し、収穫物をその所有者と折半した。ただし、労働者家族の所得(全国平均)は大部分賃金収入であった。Runes, I. T., *General Standards of Living and Wages of Workers in the Philippine Sugar Industry*, Manila, Institute of Pacific Relations, Philippine Council, 1939, pp. 16, 30.

(注32) Walker, *op. cit.*, pp. 90—92.

(注33) *Ibid.*, p. 125.

(注34) *Ibid.*, p. 20.

(注35) *Ibid.*

(注36) 高橋彰「フィリピンの砂糖地帯——ネグロス島調査ノートから——」(『地理』第5巻第10号 1960年10月) 52—53ページ。

むすびにかえて

本稿では、マニラ開港を契機に資本主義世界の従属的農業国として再編成されたフィリピンの糖業発展を考察し、とくにイロイロ港開港後砂糖地帯が形成されたネグロス島の甘蔗アシエンダ経営に着目した。その際、製糖設備の大型化の視点から、仮説として1860年代～70年代を刈分小作制から賃労働制への移行期、1880年代～90年代を賃労働者雇用に基づく資本主義的経営の成立期と設定

した。そこで賃労働制が最も進んだと思われる蒸気動力圧搾機設備のアシエンダを中心に、その経営形態の把握を試みたのである。だが、残された問題は多い。

たとえばエチャウスは1894年のその著書で甘蔗作小作農(アクサ)に言及し、その存在がかなり一般的であるような描写をしている。それによると、小作農はアシエンダ内に居住し、地主(proprietario)から多額の前借金を得て甘蔗を栽培する。そして収穫期に地主の製糖設備を用いて砂糖を生産し、負債を収穫物で返済する。また小作農は地主を扶助するために甘蔗の切断や運搬を行ない、「アシエンダの不可欠な要素」となったという(注1)。

したがって畜力や手動の小型圧搾機設備のアシエンダでは、小作農がかなり広範に存在したと思われる。蒸気動力圧搾機の導入によって賃労働者雇用を基調とするアシエンダが成立する一方、賃労働者を雇用しつつもなお地主・小作関係を基盤に置くアシエンダが相当数残存したと推測される。

またパウソンによれば、19世紀後半におけるネグロス島のアシエンダの所有規模は100～1000ヘクタールで、まれには5000ヘクタールにも及んだ。数百ヘクタールを越えるアシエンダでは、所有地の一部をインキリーノに賃貸した。この場合には中部ルソンと同様インキリーノが刈分小作と契約を結び、砂糖生産を行なったのである(注2)。

事実、エチャウスは十分な収穫が得られないアシエンダでのみ借地契約がみられたと述べている。借地契約の場合、地代は貨幣もしくは現物で支払われたが、後者の場合は収穫物(砂糖)の5分の1から3分の1が地代とされた。その上契約内容の中には地主に有利な条件が組み入れられ、

砂糖の引渡し場所が最寄りの町や棧橋、もしくはイロイロ港に設定されたり、建物の修繕、家畜・農具の更新が借地経営者に託されたのである^(注3)。これは、ネグロス島におけるインキリナート制、もしくはその変容形態と考えられよう。

こうしたアシエンダにおけるインキリナート制や地主・小作関係の存在は、今後の研究と史資料の発掘によって十分考察されねばならない。そのことによって、筆者が資本主義的経営と規定した甘蔗アシエンダ経営の特質をより具体的に把握できるばかりか、資本主義的発展の萌芽が見られた1880年代～90年代を、19世紀後半と20世紀のフィリピン糖業の結節点として位置づけることができるからである。筆者は今後、アメリカ植民地時代

のフィリピン糖業を考察する過程で、アシエンダ経営の変容形態を追求しようとする。そして糖業を基軸に、先進国アメリカの植民地となったフィリピンの経済発展により大きな照明を当てることにしたい。

(注1) Echaúz, *op. cit.*, pp. 44—45.

(注2) 前掲, インタビュー。

(注3) Echaúz, *op. cit.*, pp. 43—44.

〔付記〕 本稿で用いたプセータ、プラボの著書については、東京大学荒松雄教授所蔵の書物を愛知大学池端雪浦助教授を介して借覧し、その他若干の史資料入手にあたりフィリピン大学留学生津田守氏の協力を得た。

(一橋大学大学院)

アジア経済研究所刊行

小林 文 男 著

中国現代史の周辺

アジアを見る眼50／新書判／190頁／500円

中国現代史の總体的把握——それは共産党史を主軸としながら、伝統と共同体の問題、国民党の役割、台湾における人民革命の動態をも同時に正しく位置づけることである。本書はそうした立場から、現代中国への新しい視角を提起したユニークな論説集である。

長 井 信 一 訳

東南アジアと国際政治
—— 70年代の力の均衡 ——

アジアを見る眼51／新書判／230頁／500円

本書は、米中ソ日印5大国における東南アジア政策の展開を第2次大戦以降、74年春まで叙述している。ポスト・インドシナの東南アジア政治を展望するために必要なパースペクティヴを与える恰好の書である。

アジア経済出版会発売